山本咲子著

『女性非正規雇用者の生活の質評価

——ケイパビリティ・アプローチによる実証研究』

評者：村上　慎司

ケイパビリティ・アプローチの実証研究は日本以外では精力的に遂行されてきたが，現代日本の文脈に即した研究蓄積は神林・後藤・小林（2020）等に限定されて極めて乏しい。かかる学術的背景のもとで，本書は，生活経営学に立脚し，質的データ分析法に基づくケイパビリティ・アプローチから，日本の首都圏内で暮らす未婚の女性非正規雇用者の生活の質を評価しようと試みたチャレンジングな実証研究の成果であり，著者の博士論文に加筆・修正が施されたものである。

以下，本書の概要を述べよう。序章「研究背景と研究目的」では，まず生活を評価するために国内総生産や相対的貧困率といった客観的指標のみを用いることは国や世帯の経済状況を把握できるが，各人が送る生活の質を評価することは困難であると指摘する。次に満足度測定といった主観的指標を専ら使用することは別種の問題に直面するという。例えば，ひとり暮らしで客観的に見れば生活が苦しそうなアルバイト販売員は，賃金面の不満を理由に仕事を辞めないことがありうる。また，先行研究における性別・雇用形態別分析では，非正規雇用という働き方は，男性に対しては生活満足度を低下させるが，女性に対してはそれほど生活満足度を低下させず，女性は男性ほど非正規雇用であることに不満を抱いていないことが示されている。このように所得に関する情報や生活満足についての情報だけでは人々の生活の質を正確に評価できないことを確認する。以上を踏まえて，未婚の女性非正規雇用者の生活問題をより適切に解明できる評価方法とは何かという問題意識のもとで，本書はアマルティア・センが提唱したケイパビリティ・アプローチ（capability approach）に注目する。ケイパビリティとは，個人が財やサービスを用いて達成可能な価値をおく理由のある諸機能（functionings）の集合として定義される。ここでいう諸機能とは，人々の「行い方・行為・活動（doing, activity）」や「在り様・状態・存在（being）」の総体を意味する。大雑把に言えば，人々の望ましい生き方の幅を表すものがケイパビリティである。本書によればケイパビリティ・アプローチは生活経営学研究と共通しているという。詳述すれば，ケイパビリティ・アプローチが当人にとって必要とする諸機能・ケイパビリティの観点から生活の質を評価するのと同様に，生活経営学もまた金銭や時間といった生活資源と生活行動に焦点を当てて生活の質を論じている。さらに，両者は生活者の主体形成の考え方でも類似性があるという。生活経営学研究においてケイパビリティ・アプローチを採用する本書は，次の２つの研究目的を設定する。第１にケイパビリティ・アプローチを用いた実証研究の一例を示すこと，第２に日本における未婚の女性非正規雇用者の生活の質をケイパビリティ・アプローチによって検討し，その生活の困難を見いだし，生活の質向上のための含意を提案することである。

第１章「ケイパビリティ・アプローチ」は，本書の調査方法を検討するために，まずアマル

ティア・センとマーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチを概説する。主に資源利用能力の意義，自由の評価，Nussbaum（2000=2005）等が提唱する「人間の中心的なケイパビリティのリスト」（以下，「ヌスバウムのリスト」）が言及・検討される。ここでいう「ヌスバウムのリスト」とは，（1）生命（life），（2）身体的健康（bodily health），（3）身体的保全（bodily integrity），（4）感覚・想像力・思考（senses, imagination, and thought），（5）感情（emotions），（6）実践理性（practical reason），（7）連帯（affiliation），（8）自然との共生（other species），（9）遊び（play），（10）環境のコントロール（control over one's environment）：A. 政治的（political）・B. 物質的（material）という10項目から構成される。次に先行研究のケイパビリティ・アプローチに関する調査方法が整理される。以上の作業を踏まえた上で，本書は問題発見的かつ文脈依存性的な特徴を持つ質的調査法を採用する。そして，本書の研究対象者である日本の未婚女性非正規雇用者に関するケイパビリティ研究がこれまでに行われていないため，本書は，研究対象者が生活するために必要とする機能を抽出し，それらの機能の達成状況を問うという調査方法を設計する。具体的には，以下の3つの調査・分析手順の段階がある。第1に，ブレーンストーミング法によるワークショップ調査を実施し，研究対象者の生活を営む上で必要となる機能の全体像を描く。第2に，上記のワークショップ調査から導出された機能を基にしてリストを作成し，その機能リストを用いた個別インタビュー調査を実施して，利用可能な資源，資源利用能力の特徴，そして，各種機能の達成状況を把握する。第3に，各種機能の達成可能性の差異について研究対象者を雇用形態別に比較分析して，非正規雇用者の特徴を明らかにする。

第2章「生活に必要な機能は何か」は，調査・分析手順の第1段階であるワークショップ調査の具体的内容・結果を紹介し，「ヌスバウムのリスト」の観点から分類・考察する。特筆するべきは，本書の機能リストに現代日本の文脈に照らして「ヌスバウムのリスト」にはない「情報収集」を追加していることである。

第3章「機能の達成状況，資源と資源利用能力」は，まず第2章のワークショップ調査結果と先行研究の知見から，機能に関する60項目のインタビュー調査項目を構成する。次に研究対象者に対して，60項目の機能が自分自身の生活にとって必要かどうかを①「絶対必要」・②「必要」・③「不要」という3つの選択肢から回答させて，その後に，その機能の達成状況に関して「達成」か「未達成」かを問う。ここで重要な論点は，機能達成は主観的に評価されているため，仮に達成の程度が客観的に小さくとも，研究対象者はそれを過大評価する可能性があるということである。このことは次の第4章の内容に継承される。

第4章「適応的選好形成の検討」は，研究対象者の生活の質に関する評価が適応的選好形成に影響されているのかを検討する。適応的選好形成とは，Elster（1983=2018）で論じている概念であり，効用のような主観的基準によってのみ福祉や生活の質を判断すると不遇な境遇への適応という問題を生じることを意味する。このことはセンの研究でも指摘されており，本書はSen（1992＝2018）を参照して，適応的選好形成による人々の行動を，①嘆き悲しみ不満を言い続けない，②状況を急激に変えようと望む動機を欠いている，③根絶しえない逆境とうまく付き合う，④小さな変化でもありがたく思う，⑤不可能なことやありそうにないことを望まないようにする，といった5つのポイントに

分類する。これを分析枠組みとして，インタビュー調査で収集した語りのデータに対して質的データ分析を行う。その分析結果から研究対象である未婚の女性非正規雇用者は適応的選好を形成しやすい傾向があることが実証的に示される。

第５章「生活に必要な機能の雇用形態別比較」と第６章「機能，資源と資源利用能力の雇用形態別比較」は，本書の研究対象である未婚の女性非正規雇用者との比較分析を行うため，未婚の女性正規雇用者に対しても第２章のワークショップ調査と第３章のインタビュー調査を同様に行う。かかる比較分析結果の一端を述べると，第５章では機能項目「感情」・「自然との共生」・「遊び」において未婚の女性正規雇用者のほうが未婚の女性非正規雇用者よりも回答数が多く，こうした機能の必要性を認識していることが示される。第６章では両者において金銭と時間という資源不足の差異が大きく，正規雇用者の年収額の違いに加えて職場から提供される住宅手当や社宅といった企業福祉の有無も大きな影響を及ぼすといった知見が導かれる。そして，時間不足については未婚の女性非正規雇用者のほうが未婚の女性正規雇用者よりも時間不足によって達成できない機能が多いこと，さらに，未婚の女性非正規雇用者はより多くのモチベーション不足や将来の不安感に関する語りのデータが特徴的であることが明らかになる。

ここまでの本書における分析・考察の大半は，実際に達成している機能を論じたものであるが，ケイパビリティ・アプローチの理論的射程には，様々な機能の集合から選択する自由，換言すれば，選択しようと思えば選択できる機能の達成可能性までも含んでいる。そこで，第７章「機能の達成可能性についての事例研究」は，分析困難な機能の達成可能性を論じるために事例研究を遂行する。まずは第３章や第６章のインタビュー調査結果の分析・考察を踏まえて，研究対象者の生活にとって重要と考えた「健康でいる」・「人間関係を維持・構築する」・「自尊心を持つ」という３つのケイパビリティを構成する機能を検討する。そして，この３つのケイパビリティを構成する機能の達成可能性・強靭性・脆弱性について分析する。具体的には，最も生活が困難であると想定される未婚の女性非正規雇用者と，その比較対象となる年収が一番高い女性の正規雇用者のインタビュー調査の語りから，未婚の女性正規雇用者は達成可能であるが未婚の女性非正規雇用者は達成できていない機能とは何であるのかを示し，当該機能が選択されない要因や，その達成度が脆弱であることの背景要因を探索的に分析する。両者の語りのデータに基づく分析結果から，当該未婚の女性非正規雇用者では関連する機能の選択数が，比較対象者のそれよりも少なく，前者の脆弱性が示される。このことは，単に所得の多寡だけではなく，教育投資や安定した雇用といった多様な生活資源不足に由来することが語りのデータから裏付けられる。

終章「総合考察」では本書全体の考察・成果や研究方法に関する課題点・限界点について述べている。その内容と関連づけて，本書に対する評者のコメントを行いたい。第１に，本書自身も成果として記してあるように質的データ分析の利点を生かした適応的選好形成に関する議論は，評者もケイパビリティ研究への優れた学術的貢献だと考える。第２に，本書のインプリケーションとして提示されている未婚の女性非正規雇用者の「感情」に関する機能やモチベーション不足に関する実証的解明を踏まえた教育支援の必要性もまた学術的かつ社会的に有意義である。この点について教育社会学におけるケイパビリティ研究の１つであるHart（2012）はアスピレーション（aspiration）概念に注目

しているが，これから本書の研究を発展させる場合に同概念が有益な役割を果たすと考えられる。第3に，本書の限界点と関わるが，研究対象者が全て首都圏内の居住者であるため，日本の他の地域で暮らす未婚の女性非正規雇用者との比較分析は，評者にとって興味深い。本書の88頁で言及しているように，ペットとの共生の阻害要因が首都圏の住宅環境であれば，他の地域においては当該機能の達成可能性が高まるかもしれない。また，ある種の地方に存在している緊密な人間関係は，逆機能として作動し，同調圧力のような形で生活の質を損なう可能性もありうるだろう。このように本書の分析を地域間で応用することも残された課題になる。最後に，評者は本書の第7章における機能の達成可能性の議論はやや説得力が弱いという印象を拭えない。かかる難題に対して，評者は現時点で有望なアイディアを持ち得ていないが，Comim（2008：175）で指摘されているように計量経済学的分析の潜在変数（latent variable）が手掛かりとなるかもしれない。こうした計量経済学的研究と本書のような質的研究を組み合わせることがケイパビリティ研究のフロンティアであるという確信を，評者は本書の読解を通じて強めた。

（山本咲子著『女性非正規雇用者の生活の質評価――ケイパビリティ・アプローチによる実証研究』明石書店，2023年11月，217頁，定価3,600円＋税）

（むらかみ・しんじ　金沢大学人間社会学域地域創造学類講師）

【参考文献】

Comim, Flavio（2008）Chapter 6 Measuring capabilities, In Flavio Comim, Mozaffar Qizilbash, and Sabina Alkire（eds.）*The Capability Approach: Concepts, Measures and Applications*, Cambridge: Cambridge University Press.

Elster, Jon（1983）*Sour Grapes: Studies in Subversion of Rationality*, Cambridge: Cambridge University Press.（=2018，玉手慎太郎訳『酸っぱい葡萄――合理性の転覆について』勁草書房）

Hart, Caroline Sarojini（2012）*Aspirations, Education and Social Justice: Applying Sen and Bourdieu*, London: Bloomsbury.

神林龍・後藤玲子・小林秀行（2020）「外出・在宅活動へのケイパビリティ・アプローチの応用の試み」『経済研究』71（3），209-236.

Nussbaum, Martha（2000）*Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge: Cambridge University Press.（=2005，池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳『女性と人間開発――潜在能力アプローチ』岩波書店）

Sen, Amartya（1992）*Inequality Reexamined*, Oxford: Clarendon Press.（＝2018，池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討――潜在能力と自由』岩波現代文庫）